ギリシア・ラテン文学研究

——叙述技法を中心に——

久 保 正 彰 著

岩 波 書 店

ギリシア・ラテン文学研究

一九九二年二月一〇日　第一刷発行©

定価九八〇〇円
（本体九五一五円）

著　者　久保正彰

発行者　安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
発行所　株式会社　岩波書店
電話 〇三-三二六五-四一一一（案内）

印刷・理想社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-002730-1

序

古代ギリシァ・ラテン文学の示している、様式上の大きい特色は、大自然や人間世界の営みを語ろうとする、さまざまの叙述の形である。中でも、ギリシァの黎明期に端を発して以来、古代末期にいたるまで、大河の流れのように継承されてきた叙事詩文学は、詩文の雄である。他方またギリシァ古典期に創出されローマ帝政末期にいたってもなお旺んに書き継がれた歴史記述は、まさに古代散文芸術の代表と称せられよう。両者は各〻の様式において異なるものではあったが、共に雄大な展望と視野のもとに、人間なるものの思想と行為を描きだす企てを遂げ、その幾多の成果は世界文学の一角に輝きを添えるものとして、今日もなお高い評価をうけている。

本書に収められた論文は、いずれも、古代叙事詩文学と歴史記述という壮大な世界の、ごく限られた一部分に関する調査と研究をまとめたものである。人間についての、あるいは文芸についての、一般読者の感興に応えうるものも一、二篇はあろうかと思うが、多くはあまりに微細な事柄のみに論が終始していたり、あるいは遠く過去の世界に埋没してしまった名前や事柄に関わる部分が多過ぎるおそれがある。そのために、各論と、大きい一般的問題との関わり方について、簡単な解説を記しておきたい。蛇足の咎めをまぬがれることがかなうならば幸甚である。以下、収録されている順に従い、各論の意図するところを述べたい。

第一部は古代叙事詩の周辺問題を扱うものである。第一章「ことばから文字へ」は、『イリアス』『オデュッセイア』などのホメロス叙事詩が、口誦叙事詩という上演と伝承の形態から、今日伝わるような、精密な校訂作業をふまえた伝本の形態に至るまでの、過程と時代について、今日私たちの考え得る一つの輪郭を明らかにしようとしている。問題は十八世紀末から続いているものであるが、本論の特色は、口誦詩が文字に写され、読書に耐えうる「読み本」

としての形をとりうるためには、従来の多くの研究者が推定しているように、一、二世代の年月において完成される作業ではなく、そのためにはゆうに一、二世紀あるいはそれ以上の年月を必要とするという前提をあえて掲げて、その妥当性を検討している点にある。そのような前提が妥当であると思われる理由としては、現存するホメロス原本は前二世紀の校本に準拠していながら、本文は口誦叙事詩の技法に基づく措辞・詩法を忠実に保持しているという逆説的事実があげられる。この逆説的事実を解明することのできる恐らく唯一の仮説は、前二世紀校本の成立に際して、古代の校訂者たちはそれ以前の諸伝本の本文と同程度に、あるいはそれ以上に、当時なお、隆盛を誇っていた口誦叙事詩人の職業的口伝の文言に多大の信憑性を認め、これに依拠する本文校訂を行なった、という想定である。この想定は、口誦詩は文字使用社会において衰退死滅するという一部の学者の所説の根本的見直しを求めるものである。古代ギリシャにおける職業的口誦詩人たちはローマ帝政期まで盛んに活躍していたし、また、完全に成熟度に達した識字社会においてこそ、高度に文芸化され、文芸としての評価に耐えうる叙事詩文学の成立がかなうものであることは、『平家物語』の読み本成立のいきさつがこれを如実に告げているところでもある。

右のような前提のもとにホメロス本成立についての再検討の結果として、伝説的ホメロスがいつの時代の人であったとしても、かれを始祖に仰ぐ口誦叙事詩の伝統が、はじめて文字化の緒に接しえたのは、前六世紀半ば以降のアテナイにおいてであろうが、その後三、四世紀の間に「読み本」としての緩やかな生長をたどる一方、最終的には前二世紀半ば、他方において口伝によって洗練され精確に保持されてきた叙事詩の口誦伝統を、本文校訂に際しての主流として樹てることによって、文字の形に結晶したとの結論は不可避であろうと思われる。

第二章「『名婦の系譜』における叙述技法」は、ホメロスとほぼ同時代の詩人ヘシオドスの作として伝わる、『名婦の系譜』を扱う。この作品は、中世に湮滅したものと目されていたが、二十世紀中葉に入ってから多数のパピルス書巻の中にこれを記載したものが発見された。そしてこれがメルケルバッハ、ウェスト両氏の『ヘシオドス断片集』に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

よって編輯公刊されるに及んで、その物語り構造の概要が復原されるに至った。他方、ヘシオドスの現存作品を伝える写本中には『盾』と題される小作品が含まれているが、その冒頭部分は、本来『名婦の系譜』の一節を構成していたとの見解が、古代より伝わっている。本論文の第一部は、『ヘシオドス断片集』によって復原された『名婦の系譜』の物語り構造を先ず再検討し、復原の諸前提を吟味しつつ、そこに織り出されてくる神話・伝説上の女性とその系譜の特殊性を明らかにし、その中で占めるべき『盾』の冒頭部(＝アルクメネーの系譜)の位置と意義についての考察をおこなう。第二部は、アルクメネーの系譜に用いられている措辞の性質についての詳細な解析を試み、いわゆるホメロス以降のギリシァ叙事詩が示す言語的混淆性と、それを生みだした個別の原因を究明している。これによって『イリアス』『オデュッセイア』の伝承と並行する形で別種の叙事詩技法が、『名婦の系譜』のごとき作品とその伝承を生みだしていた経緯を明らかにする。そして第一章で仮説として示した「ことばから文字」への過程が刻み残した本文の文言上の特色を具体例によって示すことを目的としている。

第三章「叙事詩文学の系譜」においてはホメロス校訂家たちの一人として、ヘレニズム時代の代表的叙事詩人、ロドスのアポロニオスを取り上げる。『アルゴ号叙事詩』の第一巻に附された織布の文様描写を対象として、その題材と言語的特色を詳細な検討に附した結果、これまでこれを論じてきた殆んどすべての研究者が見落してきた重要な事実を指摘する。すなわちこれは単に神話・伝説的素材を文様にちりばめた装飾の平板な描写にとどまるというのが従来の評価であった。しかしこれに対して本論文の検討結果は、これが、アポロニオス以前の名ある叙事詩作品についての婉曲な言及と評価をかねた、詩的比喩による叙事詩文学論であることを告げている。またそこには、アポロニオス自身、叙事詩人の系譜の正統的継承者たらんとする文学的抱負をも語る部分があるところを示している。

第四章「色と変容」は、ギリシァ、ラテン両文学における色彩語彙の問題を比較対照的に捉える。そして特にローマの詩人オウィディウスの叙事詩『変容譚』の中での色彩語彙の用法と色彩観を詳細に検討する。そしてこの叙事作

品において色彩語彙そのものはまったく類型的かつ平板な種類に属するけれども、オウィディウスは色彩語彙を眼で見える物体の色彩表示や描写の道具として用いることを避け、人間の行為や心情の描写の有機的一因子として活用し、いわば色彩語彙を叙事詩の隠喩(メタフォラ)として効果的に用いる詩人であったことを明らかにする。オウィディウスの叙事詩における色彩語彙の正確な研究は、文脈の意図を重視しなくては成り立たないことをとくに強調するものでもある。

第五章「サッフォーの詩をもとに(Ex Sapphus Poematis)」は、オウィディウスの『サッフォーの手紙』の成立由来をめぐる十五世紀末の、イタリア人文学者たちの論争を中心に扱う。同時にルネサンス期におけるギリシァ、ラテン文学研究、とくに叙述技法の研究の、重要な一側面を、詳細に論じたものである。またそのような論争が最初の口火となって、ギリシァ女流詩人サッフォーの作品断片を集成する試みが始められたことも明らかにしている。

以上五篇の小論は、古典文学史上の、あるいは文学研究史上の微細な問題ばかりを扱った、いわば落穂拾いの類であって、古典的名作や代表作が伝えるメッセイジを正面から取り上げたものではない。物足りなく思われる方もあろう、そのような方は、恐縮ながら、拙著『オデュッセイア――伝説と叙事詩』(岩波セミナーブックス3、一九八三)をご覧願えれば、幸甚である。

本書第二部は、ギリシァの歴史記述における叙述技法を取り上げるが、主たる題材は、前五世紀の歴史家ツキジデスの『戦史』である。

第一章は、ツキジデスの歴史記述に寄せられている問題や、かれの著作を理解するための基本的事柄についての、解説的意味合いの小論五篇をあわせて、「歴史の中の歴史家像」と題している。ここでの〝歴史〟とは、かれが残した歴史記述を指すと同時に、かれの記述と記述成立問題に寄せられた、後世の評価をあわせて意味するものである。

その第一節は、後世の研究家たちがツキジデスに寄せた種々の評価の中で、近世、現代のツキジデス研究の中核を占める、『戦史』成立をめぐる問題を主題とする。E・シュヴァルツの克明な分析論が、今日のツキジデス研究の出

発点となるべきことは明らかながら、しかしなお慎重な再検討の必要性を指摘する。

第二節は、ツキジデスの『戦史』が記述の基本的枠組としている編年式地区別記述方式の歴史的背景を概観する。従来これは、農事暦あるいは医学者の臨床記録などの書式を模してツキジデスが案出したもの、との説が唱えられていたが、これらはツキジデスの多地域を統合的視野の下に収めた編年記述体の構想とは根本的に異なるものである。本論は、地中海沿海地域をはじめて統合的課税区域に統一したペルシァのダレイオス王の徴税組織、そしてこれを踏襲してデロス同盟という軍資金調達機構を完成したアテナイの徴税機構の仕組みに着目する。同一年次における、多地域からの年賦金収納が編年式の記録作成を要求した経過から判断して、これがツキジデスの編年記述体の手本となったものであろうと推定している。

第三節は、ツキジデスが大作『戦史』の完成に取りかかったのはペロポネソス戦争終了後(前四〇四年春)というのはすべての研究者の一致した見解である。そしてそのために開戦当初より、重要事項の記録をノートもしくはメモの形でパピルス紙片に書き溜めていったことも疑いを容れない。そのメモは勿論伝存しないが、実はそのメモの作成方式と、伝存する『戦史』本文との関係が、多少なりと明確になれば、『戦史』成立問題の一隅に重要な楔を打ち込むことができるはずである。本論は、ツキジデスのメモが最初から明確な政治的予測のもとに、綿密な組織的方法によって作成されていなかったならば、これは後日のかれの編年式記述体の『戦史』の材料としては無価値に等しいものとなったであろうと考えるべき、諸理由をあげて検討に附すものである。ツキジデスの当初の予測は戦後無残に潰えたけれども、そのメモは組織的記述方式によるものであったがゆえに、歴史記述の貴重な資料となり得たのである。

第四節は、ツキジデスを実録作成者から歴史家にしたものは何であったのか、この問いとありうべき答の輪郭を、大戦終了後のアテナイの知的、道徳的情況の中から汲みとろうとする試論である。ソフォクレス悲劇の神話的提示法や、ソクラテスの哲学的提示法と比べて両者のいずれとも異なる第三の提示法、すなわち歴史記述による人間の行為

の説明を強く求める時代の流れがあり、これがツキジデスを歴史家ならしめたモーメントである、と結論づける。

第五節は、ペロポネソス戦争終結後、ツキジデスが、この大戦争をペルシァ戦争の戦後処理の最終的過程として統一的に把握する史観を抱くに至った道筋を辿ってみる。『戦史』の演説文に現れるペルシァ戦争とその事後処理の功罪をめぐる言及を精査してみると、演説の発言者はペルシァ戦争という一つの過去の定点を基点として、自己の歴史的位置を定め判断を形成していく例がきわめて多いことに気づく。そしてこの定点を基点としてペロポネソス戦争の個々の出来ごとが、座標上の点のように記録される。そして最終的にはペロポネソス戦争の全体像が、点々と浮び上るペルシァ戦争との対比によって、明確化する。『戦史』の全体像の構想は、ペルシァ戦争という屈折した鏡面に映ったアテナイの、そして全ギリシァの、自画像として成立したもの、ということができる。

以上をもって概説的性質の「歴史の中の歴史家像」を閉じることとし、次に、『戦史』全体に統一的観点を附与している三つの問題と、それらを扱うツキジデスの叙述技法について考察を試みることにしたい。三つの問題とは、内乱の思想、歴史記述と偶然性、そして歴史記述と人間性という三題であるが、じつは三題とも互いに関連しあう面も少なからずあり、論旨が重複するところも多少あるけれども、お許し願えれば幸いである。そして三題があわせて結論とするところも一つであって、すなわち歴史記述が最終的に解明すべきこと、また解明できることは、人間性と人間の本性以外の何ものでもないという結論に至る。

第二章「内乱の思想」は、『戦史』第三巻八二、八三、八四章に記された「内乱省察」の項を中心として、これら三章の記述対象、観点そして叙述の技法は各〻に異なるものであるが、これらのうち第八四章を文体、措辞の異色性から後世人の附記とするゴム、プリチェットらの見解を採らず、三つの章が示す各〻の際立った差異と特色は、内乱現象を三つの異なる局面から考察するに至ったツキジデスの史観を表わすものという見解を示す。

すなわち第八二章はアテナイ・スパルタ両大国からの圧力にはさまれた小国の国内政治の乱れが、大国からの内政

干渉を招き、たちまち内乱すなわち政治機構の崩壊という事態に至ることを述べているが、これは視点をかえて大国側から見れば、内乱使嗾は大国の支配圏増大につながる最も効果的方策であったと言うことに等しい。また事実そのような事例が、『戦史』記述中に頻出している。これは、ツキジデスが、四二四年アテナイの指揮官職を追われるまでの、「内乱」を他国征服の一手段と見做していた時期における考えであった可能性が強い。

第八三章は、内乱に至る過程にみられる国内政治派閥の領袖たちの行動形態とかれらの動機を類型的に詳述する。その分析的記述は、内乱指導者たちの心奥にまで深く切りこんでおり、その視点は第八二章のように内乱現象を国際政治のせめぎあいの場において、外から政治力学の問題として捉えているわけではない。第八三章の分析は、多くの研究者が指摘するとおり、前四一二年のアテナイにおける民主政崩壊の際に暗躍した数名の政界指導者たちの動機と行動の類型に酷似するものを対象化しており、第八三章の分析と省察は前四一二年の事情を詳述した『戦史』第八巻の記述時点以後の、ツキジデスの思想的展開のあとをとどめているものであろう。

第八四章は、前二章とはさらに対象を改め、内乱に際して無秩序が許すままに暴徒と化した社会の下層の、被抑圧者の行動と群衆心理を叙述する。文体的にも前二章とは異なるために、ツキジデスの作ではないとする見解が主流となっているが、本論は、文体の不連続性よりも、第八四章で描出される人間の本性はツキジデスの思想的展開の中でのみ説明可能のものであるという見解に立ち、この章は、ツキジデスの「内乱の思想」の一極を構成すると考えている。

「内乱省察」三章の各〻の観点と考察内容は、ケルキュラ内乱のみならず『戦史』全八巻に散見される各地の内乱記事を具体的事例としている。その面から言えば、『戦史』の全体像の一面のまとめと見做すことは可能である。しかしまたその反面、歴史の動因の最たるものは、持つものと持たざるもの、支配者と被支配者との絶えざるせめぎあいの場に生じているという見方に立てば、内乱こそ歴史をすすめていく力の現れであり、大戦争は、単にそのような

内乱を加速させていく歴史の副次的要因という地歩に退くことになるだろう。ツキジデスの「内乱の思想」には、そこまで踏みこんだ考察は語られていない。しかしかれが『戦史』記事として記載している内乱事件の夥しい数は、ただその悲惨さを強調するためだけのものではなく、深く人間の本性に根ざす歴史の動因についての思いがあったためではなかろうかと思われる。

第三章「歴史記述と偶然性㈠」は、アリストテレスの『自然学』における偶然性の概念を援用することによって、ツキジデスの『戦史』において、偶然に起因したとされる出来ごとの性質を解明する試みである。すなわち、意図的、合目的的な行為に附随して生起する随伴的出来ごとを偶然性に依るものとし、さらに思想もしくは意図が働く限りにおいてまた、偶然的な、予測されなかった出あいが生ずる。このアリストテレスの概念は、『戦史』においてツキジデスが〝偶然〟という表示を用いている場合にも適合する。しかしツキジデスは、〝偶然〟がしからしめたと言うこともできるような出来ごとであっても、あえて〝偶然〟と言うことを控えている場合もあり、そのような時にはかえってかれの偶然観を逆の面から浮び上らせる。第二巻の疫病記事がその好例であり、本論はとくにこの記述の性質と意図について詳細な検討を加え、さらにかれが指摘する〝出来ごとの反復性〟の意味は、従来の解釈のごとくに疫病そのものの反復性を指すものとはせず、むしろ、偶然的災害によって人間性が崩壊に瀕するという危機的事態を指しているという解釈を示す。

第四章「歴史記述と偶然性㈡」は、前章に続いて、第四巻の「ピュロス戦記」の中で頻発する偶発的出来ごとと、それらについてのツキジデスの見解を、従来の所説を精査しつつ精密に検証したものである。結論のみを述べれば、「ピュロス戦記」には確かに偶然的に生起する出来ごとが、強調的に指摘されている。しかしツキジデスの意図は、この戦線の指揮官デモステネスの合目的的な計画とそれを遂行しようとする意志を、明確に浮び上らせることにあり、偶然的要素についての言及はそのために欠くべからざる叙述技法の一端であったと思われる。偶然的出来ごとは、デ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

モステネスの人間的資質が赴くところに附随する影のようなもの、と言うのが、本論の結論である。

全体的にみれば、「合目的的な行為が出あう、予測しなかった随伴的出来ごと」としての〝偶然〟は、ツキジデスの『戦史』成立と深く結びついた問題である。合目的的な戦争行為の実録として、かれのメモが当初より明確な予測とそれに添った組織的方法にしたがって、順次綴られていたであろうことは、前章で述べたとおりである。戦いが終結したとき、確かに信頼に値するメモは残った。しかし戦争は、諸〻の随伴的出来ごとのために、当初の計画を大きく狂わせ、まったく予想もされなかったアテナイの敗戦という結果に終った。「なぜこのような結果に?」という深刻な問いに対する答が、『戦史』として立ち上っているのである。その原因は、人間にあるのかそれとも予測不可能の偶然にあるのか。ツキジデスにおける偶然論が、かれの人間論と不可分の関係にあるのは、それゆえであろう。だが人間にとって、理解できるものは偶然性ではなく人間性だけなのである。

第五章「歴史記述と人間性」は、ツキジデスが歴史の動因と見ている、「人間の本性」なるものについて、詳述している。これまでの各章において検証してきた事例からも判るように、ツキジデスの原因探究は、疫病記事であれ内乱記事であれ、あるいは一見偶然の事態に翻弄され続けるがごとき「ピュロス戦記」であれ、最後は、それらの事態を動かしていく人間の本性をとらえ、さらに出来ごとによってあらわにされる人間の本性についての批判的検証に至る。人間世界における出来ごとの真の原因は、ただ人間のみである——これこそがツキジデスの飽くなき真理探究を支えてきた信条であり、また、これこそがかれの真理探究によって明らかにされた歴史の真実である。

以上は、筆者が開陳を意図したところのみを大摑みに説明したものである。果たして意とするとおりの論述の態を成しているかどうか、読者諸賢からの御批判を仰ぎたい。このような十章のみによってギリシャ・ラテン文学研究のいかほどの部分を語り得ているのか、自問するときその答はあまりに少なく、忸怩たる思いを禁じえない。

だがあえてこの十章を選んだ理由をまとめて言うならば、筆者なりの能力と方法によって、人間のことばが文字へ、

文字が人間行為の客観的記述へと、画期的な進展をとげた一つの文化とその時代の特色を追跡してみたいと願ったからである。取り上げた問題よりも、省略されている事柄の方が遥かに多いこともおわびしなくてはならない。このように不備の書物であるけれども、より高度の研究と綜合を志す、有為なる若い研究者諸賢にとって、ささやかな道標の一つともなり得れば、筆者にとって望外の仕合せである。

目次

序

第一部　叙事詩における叙述技法の諸相……一

第一章　ことばから文字へ……三
——ホメロス叙事詩の文字化について——

第二章　『名婦の系譜』における叙述技法……三六
——『ヘラクレスの盾』一—五六を中心に——

一　『名婦の系譜』と『ヘラクレスの盾』の関係について……三七
二　系譜詩『名婦』の叙述構成における ἢ οἷη の位置について……四一
三　『盾』一—五六の言語表現について……六二
四　『盾』一—五六の詩人……九四

第三章　叙事詩文学の系譜……二六
——『アルゴ号叙事詩』一・七二一—七六三の描写技法（エクフラシス）について——

第四章　色と変容……一四九
——オウィディウスの叙事技法の一側面——

第五章　サッフォーの詩をもとに(Ex Sapphus Poematis)……一七三
——ルネサンス期のギリシァ・ラテン文学研究の一側面——
一　問題の背景——作品伝承と作者認定について……一七四
二　フランチェスコ・フィレルフォ——サッフォー原作説とその批判……一八〇
三　ドミチオ・カルデリーニ——ギリシァ学と『手紙』……一八五
四　ジョルジョ・メルラとその修辞論的『手紙』研究……一九四

第二部　ツキジデス『戦史』における叙述技法の諸相……二〇五

第一章　序説　歴史の中の歴史家像……二〇七
第一節　歴史家像の研究……二〇七
第二節　地中海世界の空間的把握……二三二
第三節　ツキジデスのメモ……二三八
第四節　歴史家誕生……二五二
第五節　全体像の成立……二六七

第二章　内乱の思想……二八九
——『戦史』三・八二—八四について——
一　内乱現象についての省察……二九一
二　『戦史』における諸内乱とその記述……三〇八
三　ケルキュラ叙述の成立……三二六

第三章　歴史記述と偶然性(一)……三三五
——疫病記事を中心に——
一　計画と〝ことのなりゆき〟……三三五
二　〝ことのなりゆき〟……三三九
三　偶然性の定義……三四二
——アリストテレスの理解——
四　ツキジデスにおける「偶然」……三四三
五　四つの出来ごとの偶然性……三四七
六　疫病記事(序説二・四七・三—四八)……三五〇
七　臨床記録(二・四九)……三五五
八　疫病と人間の条件(二・五〇—五三)……三五七
九　「人間らしさ」の構造……三五九
一〇　「人間らしさ」と偶然性……三六一
第四章　歴史記述と偶然性(二)……三七〇
——「ピュロス戦記」を中心に——
一　前四二五年春の船隊派遣決議と附帯条項……三七〇
二　嵐……三七八
三　ピュロス築城……三九四
四　デモステネス……四〇九
五　スパルタ人の偶然論……四二六

六　クレオンの放言場面……四四五
七　結　語……四七四
第五章　歴史記述と人間性……四九五
あとがき……五二
初出一覧……五三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com